

2771



伊太利王國民法

第四條

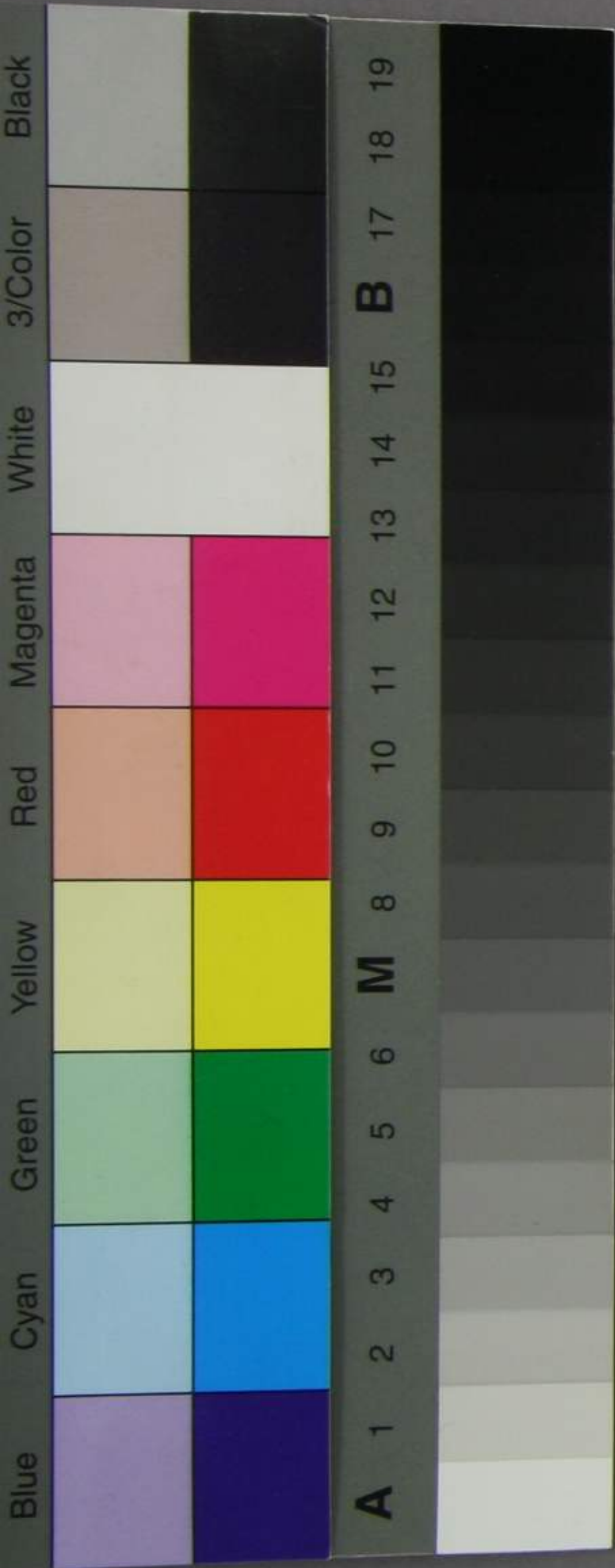
第五條

國民タル父ノ子ハ均シク國民ト為ス
假令ヒ父タル者カ其子ノ生産以前ニ
國民タル推理ヲ喪失スル一有ルモ其子カ王
國內ニ生産シ而シテ王國內ニ住所ヲ台定ス
ルニ於テハ則チ亦國民ト首做ス

然レ此其子タル者ハ我民法ニ規定セル丁年
ニ達スル以後ノ一年內ニ其在任スル地方ノ
掌籍吏ノ面前ニ公言シテ以テ外國人タル身
位ヲ擇定スル一ヲ得可シ若シ其子カ外國ニ
在任スルニ於テハ則チ其本國ノ公使若クハ
領事館ニ向テ之ヲ公言ス

第六條

父タル者カ其子ノ生産以前ニ國民ト



ル権理ヲ喪失セルニ於テハ則チ其子ノ外國ニ在テ生産シタル者ハ外國人ト首做サル可シ

然レ凡前條ニ掲載スル所ノ公言ヲ為シタル以後ノ一年中ニ其住居ヲ王國內ニ占定スルハ則チ國民ト為ルヲ得可シ

王國ニ於テ公務ニ従事シ若クハ海陸軍ニ服役シ或ハ外國人タル身位ヲ申明セシテ以テ募兵ニ應ジタル外國人ハ國民ト首做サル可シ

第七條 國民タル婦女ノ子ニシテ其父ヲ知ル可カラサル者ハ國民ト為ス

若シ母タル者カ其子ノ生産スル以前ニ國民

タル権理ヲ喪失セルニ於テハ則チ其子ニ向テ前二條ノ條文ヲ擬施ス

其母ヲ知ル可カラサル子ト雖モ王國內ニ生産スル者ハ國民ト為ス

第八條

十年以來間斷無ク其住居ヲ王國內ニ占定セル外國人ノ子ニシテ王國內ニ生産シタル者ハ國民ト首做ス但商業ノ為メニ開設スル居所ハ以テ住居ヲ占定セル者ト首做サス

然レ凡第五條ニ掲載セル期間ニ於テ同條ニ規定セル方法ニ從ヒ公言シテ以テ外國人タル身位ヲ擇定スルヲ得可シ

若シ外國人カ十年以來其住居ヲ王國內ニ占

定セルニ非サレハ則チ其子ハ外國人ト着做
ス然レモ第六條ノ第二項及ヒ第三項ノ條文
ハ其子ニ向テ之ヲ擬施ス可キ者トス

第九條 外國人タル婦女ニシテ王國人ト結妣
スル者ハ其結婚ニ因テ國民タルノ身位ヲ得
有レ其夫ヲ亡スルノ以後ト臣民尚ホ其身位
ヲ保有ス

第十條 外國人ハ法律若クハ國王ノ命令ニ因
テ認可スル入籍方法ヲ執行シテ以テ國民タ
ルノ權理ヲ得有ス
國王ノ命令ハ外國人カ其住居ヲ占定セシト
欲シ若クハ既ニ之ヲ占定セシ地方ノ掌籍吏
ノ簿録ヲ經由シ且其外國人カ掌籍吏ニ向テ

國王ニ忠節ヲ竭シ王國ノ憲法及ヒ法律ヲ遵
奉ス可キ誓言ヲ為スノ法式ヲ踐行シテ始メ
テ其効力ヲ生スル者トス

國王ノ命令ハ其記日ヨリ以後ノ六月内ニ於
テ之カ簿録ヲ為サレハ則チ無効ニ歸ス
國民タル權理ヲ得有セシ外國人ノ妻及ヒ其
夫丁年ノ子ハ其住居ヲ王國內ニ占定スルニ
因テ始メテ國民ト爲ル者トス然レモ其子ハ
第五條ニ掲記スル法式ヲ履行シテ以テ外國
人タル身位ヲ擇定スルヲ得可シ

第十一條 次項ニ掲記スル人ハ國民タル身位
ヲ喪失ス可シ
第一項 自己ノ住居ヲ占定セシ地方ノ掌籍

吏ノ面前ニ於テ公言ヲ為シテ以テ國民タ
ル身位ヲ辭棄シ而シテ其住居ヲ外國ニ轉
移スルノ人

第二項 外國ニ於テ其國民ト為レルノ人

第三項 王國政府ノ許可ヲ得ズシテ自他ニ
外國政府ノ公役ニ從事シ若クハ其兵役ニ
服従スルノ人

國民タル身位ヲ喪失セル人ノ妻及ヒ其未丁
年ノ子ハ外國人ト者做ス但依然其住居ヲ王
國內ニ占定スル者ハ此限ニ在ラス
然レ氏其妻ハ第十四條ニ規定セル方法ニ准
シ其子ハ第六條ニ規定セル方法ニ准シテ王
國ノ國民タル権理ヲ回復スルヲ得可シ

第十二條

前條ノ各項ニ特記スル事由アルヲ
為クニ國民タル権理ヲ喪失スルニ之ニ據テ
以テ王國ノ兵役ニ服従ス可キノ責務及ヒ故
國ニ向テ兵又ヲ擬スルノ罪事ヲ避免スルニ
足ラス

第十三條

國民ニシテ第十一條ニ掲記セル事
由ノ其一アルカ為クニ國民タル権理ヲ喪失
セル者ハ次項ノ時會ニ於テ之ヲ回復スルヲ
得可シ

第一項 王國政府ノ特許ヲ得テ王國ニ歸來
スルノ時會

第二項 外國ニ在テ其國民タル身位ヲ辭棄
シ若クハ外國ニ在テ從事セル公務或ハ兵

後ヲ轉棄シタルノ時會

第三項 堂籍吏ニ向テ王國內ニ自己ノ住居
ヲ占定スルヲ公言シ一年內ニ於テ現業
ニ其住居ヲ占定セシメ時會

第十四條 國民タル婦女ニシテ外國人ト結婚
スル者ハ其結婚ニ因テ夫タル者ト國籍ヲ同
クスルニ於テハ則チ外國人ト為ル者トス
其夫ヲ七ニタルノ以後ニ若シ王國內ニ居留
シ或ハ王國內ニ帰來シ而シテ堂籍吏ニ向テ
王國內ニ其住居ヲ占定スルヲ公言スルニ
於テハ則チ其國民タル推理ヲ回復スルヲ
得可シ

第十五條 前數條ノ時會ニ於テ國民タル推理

ヲ得有ニ若クハ之ヲ回復スルニ共ニ其効力
ハ法律ニ設定セル規約及ヒ法式ヲ履行セル
本日ヨリニテ始メテ起生スル者トス

